

嶋田正策小伝

— 小林多喜二の親友，および社会運動家 —

倉 田 稔

目 次

- はじめに
- 1 小林多喜二の親友として
- 2 多喜二以後
- むすび

はじめに

嶋田正策⁽¹⁾氏 — 以下敬称略，そして島田と表記 — は，小林多喜二（1903 - 1933）の親友であった。同氏抜きには，多喜二を語れないのである。また氏

-
- (1) 氏は現在，お元気で神奈川県に在住である。以下の話の主な部分は，小生とのインタビューおよび1989年の小生あて同氏の数通の手紙からなる。それゆえ引用・利用文献の指示のない部分は，それらによっている。
島田氏の作品には次のものがある。
「小林多喜二とのこと」（多喜二・百合子研究会編『小林多喜二読本』新日本出版社1974年）
「小林多喜二の思い出」（『小林多喜二読本』）
「小林多喜二と私」（『小林多喜二研究』解放社 1948年，復刻 日本図書センター1984年）
「『ネヴォ』の思い出」（佐藤八郎著・編『ネヴォの記』1976年）
「小林多喜二の恋」（『民主文学』新日本出版社 1988年2月号）
「私の『自画像』を書いたころ」（『民主文学』）
文集『自画像』— このコピーは，小樽文学館に送った，と島田氏。
「小林多喜二のある一面」（『緑丘』）
資料の幾つかを松本忠治，荻野富士夫両先生から拝借したことをお礼申し上げる。
本稿の人名参考文献として，堅田精司編『北海道社会活動家名簿仮目録』1973年5月を利用した。
本稿は，full-scaledではなく，むしろ unbalanced biography である。

は社会運動家としても、困難な活動を続けた。したがって、北海道の社会運動史にとっても紹介しておく必要がある。

1 小林多喜二の親友として

島田正策氏の父は、富山の妙教寺という小さな寺の出で、名を義正といった。父の兄は団正といい、千正寺を千歳に開いた。父は、空知の北村へいき、村役場の書記になり、養蚕を広めた⁽²⁾。

正策氏は、明治34(1901)年1月11日生まれで、姉チエ(千枝)と弟2人(末の弟は正巳(まさみ))がいた。4歳の時、祖母しず、に連れられ、母コマの兄である伯父、稲葉吉五郎を頼って小樽に来た。伯父は実子が無かったが、養子太三郎(たさぶろう)⁽³⁾がいた。ただし、正策は函館へ行って父と半年、利尻島の鬼脇で父と半年⁽⁴⁾、生活したことがある。その頃、太三郎は亡くなった。伯父は学問をしていなかったが、子供たちには教育が必要だと考えていたらしい。この伯父は、正策が4・16事件で執行猶予で自由になった直後、亡くなった。

さて正策氏は、小樽の量徳尋常高等小学校に明治40年3月に入学し、大正4年3月に高等科を卒業した。小学校6年で北海道庁立小樽商業学校(庁商)に入学手続きをしたが、受験しなかった。翌年受験し不合格になり、その翌年つまり大正4年4月に入学した。氏に1年遅れて多喜二が入学するのである。

正策氏が初めて多喜二に会ったのは小樽の紅葉橋通りであった。多喜二を含めて3人の少年が皆、塩見台小学校から庁商に受験しに来たのだが、雪の中を笑い転げていた。この時、多喜二が一番元気で、ふざけていた。しかし多喜二以外は、その後、浪人した人も出たが、結局だれも合格できなかった。

(2) 島田は、父を養蚕学校の先生だったとも書いている。「小林多喜二のこと」236ページ

(3) 友人長島の子息、当時、北海商業学校の生徒。

(4) 小学校1年生くらいの時、祖母に連れられて行った。

正策は、庁商最高学年のとき、展覧会があって、出品した。白華の林の絵であった。灰野文一郎も出した。高砂町の水戸家の次男範雄もいた。展覧会は電気館〔今の銀座通りにあった〕で行われ、多喜二も出品している。

正策は庁商で剣道の選手になる。剣道の先生は横溝勤也で、三菱の剣道師範もしていた。だから、島田が大正9年に庁商を出てから、三菱鉱業北海道炭売所に就職するのは、この先生の関係である。この支店長は田中丸裕厚といい、庁商からは主に剣道の選手が多かったが、6人入社した。

正策は、入社後、10月に室蘭に転勤した。多喜二主宰の『素描』には「汗にまみれた土くれ」を寄せた。『素描』は、手書きであり、1冊しか作らなかった。当時、謄写版は流行っていなかったのである。これは7号まで出た。表紙は斎藤次郎——庁商での多喜二の同級生——が描いた。

多喜二が小樽高商の1年生の修学旅行で室蘭に来たとき、正策は彼を会社の寮に泊めた。会社の島崎と皆川が一緒だった。室蘭には1年半いて、小樽に転勤した。それから小樽でもう一度、絵の展覧会をやっている。「絵鞆」(えとも)を出品した。多喜二は出さなかった。水戸範雄は、その後上京し、片田(多)徳郎(日展審査員)に師事した。

当時、博文館から『少年世界』などが出ている。コマ絵(カット絵)を募集していた。この頃は皆、美濃紙に描いていた。正しくはドウサ半紙という。正策の絵は、『中学世界』に入選した。「鋤をかついだ農夫」であった。賞金として1円貰った。多喜二の絵が『文章世界』に入選したことは島田は知らなかった。

展覧会は、高桑市郎(小樽中学在学)がやっているグループと正策らのグループと両方がそれぞれやった。多喜二は両方に加わっていた。なお手塚伝記で白羊会について1920年9月18、19日としている記述があるが、1922年が正しい⁽⁵⁾。

1922年春、正策は室蘭から小樽に転勤になった。多喜二は高商の2年生と

(5) 手塚英孝『小林多喜二』上、新日本出版社 44ページ。なお、手塚は白羊会としているが、島田は白羊会としている。

なった。多喜二とは、全く恋人に再会するような気持ちで、毎日のように会った。1922年の8月20日に島田は、文集『自画像』を出した。これに多喜二は序文を書いた⁽⁶⁾。

多喜二は小説「兄」⁽⁷⁾を書いた。島田をモデルにしたものである。もちろんフィクションが入っている。多喜二は「俺は何でも小説にしてしまう。……」と言っていたが、とうとう島田もネタにされてしまった⁽⁸⁾。その小説にはその弟が出ている。正策氏の弟は正克(まさかつ)というが、その人が小説中の弟である。

正克は、高等小学校を出た。師範学校へ入りたかったが、年齢の関係で入れず、鉄道講習所に入る。そこには普通科、専門部、高等部があった。専門部を出て、高等部へ行こうとしたが、高等部がつぶれ、専門部で終わった。大学へ行きたいと言ったが、行けなかった。つまり弟から正策に、大学に行きたいから月10円くらい貸してもらいたいと申し入れがあった。だが当時、正策氏は父母兄弟と離れて生活していた結果、家族という実感が薄れていたため、拒否してしまった。こうして弟は大学を断念した。そして鉄道技師となり、土木を担当した。彼は小樽築港の貯炭場の高架を作った。終戦時、急性肺炎で亡くなった。

田口タキを身請けする前に、多喜二は「びっくりすることをするぞ」と言っていた。彼はそれまで口ぐせのように「俺のワイフは女子大出だ」と、冗談とも本当ともつかぬ様なことを言っていた。タキの身請けのときの金(=500円、タキはその半分は貯めていた)は、多喜二が初め蒔田栄一(当時、小樽高商の英語の専任講師)に頼んで断られた。その後、多喜二は島田正策氏に頼んだ。だがその時、蒔田に頼んだことを多喜二は正策に言っていない。多喜二に借金を頼まれたころ、ちょうど正策にはボーナスが出た。それは月給の3カ月以上であった。ちなみに初任給は34円であった。ボーナスは200余円であった。この200円を多喜二に貸したのである。だから手塚英孝著『小林多喜二』は間違

(6) 『小林多喜二全集』(新)第6巻 新日本出版社 1982年、所収。

(7) 同上。

(8) 「私の『自画像』を書いた頃」(『民主文学』)

いである。手塚は書いている、「島田は商業をでて5年間の貯金の大半をはたいて200円の金を貸してくれた」⁽⁹⁾。残りのお金のことは、多喜二は「まあ何とかなるさ」と言っていた。

貸した金のうち多喜二は50円だけ返した。島田氏は、はっきり覚えていないが、間もなくだったようだという。つまり差引き150円は返していない勘定になる。多喜二は銀行を止めたとき、月給110円であった。正策氏はこの頃60～70円であった。

タキが勤めていた傘屋（やまきや）が入船町にあることは、まちがいない。正策氏自身が訪れている。多喜二とは別に、正策氏はタキを見に行っている。入船町の大通りを下から右に行くと花園公園へ行くが、そこへは行かず、その曲がる所を少し上がったあたり、つまり通りの左側にあった。その手前に左折道がある。（地図参照）

多喜二はタキを、初め奥沢に住ませた。「やろうと思ったがしなかった」と言った。病気のことではないかと、島田氏は推測している。

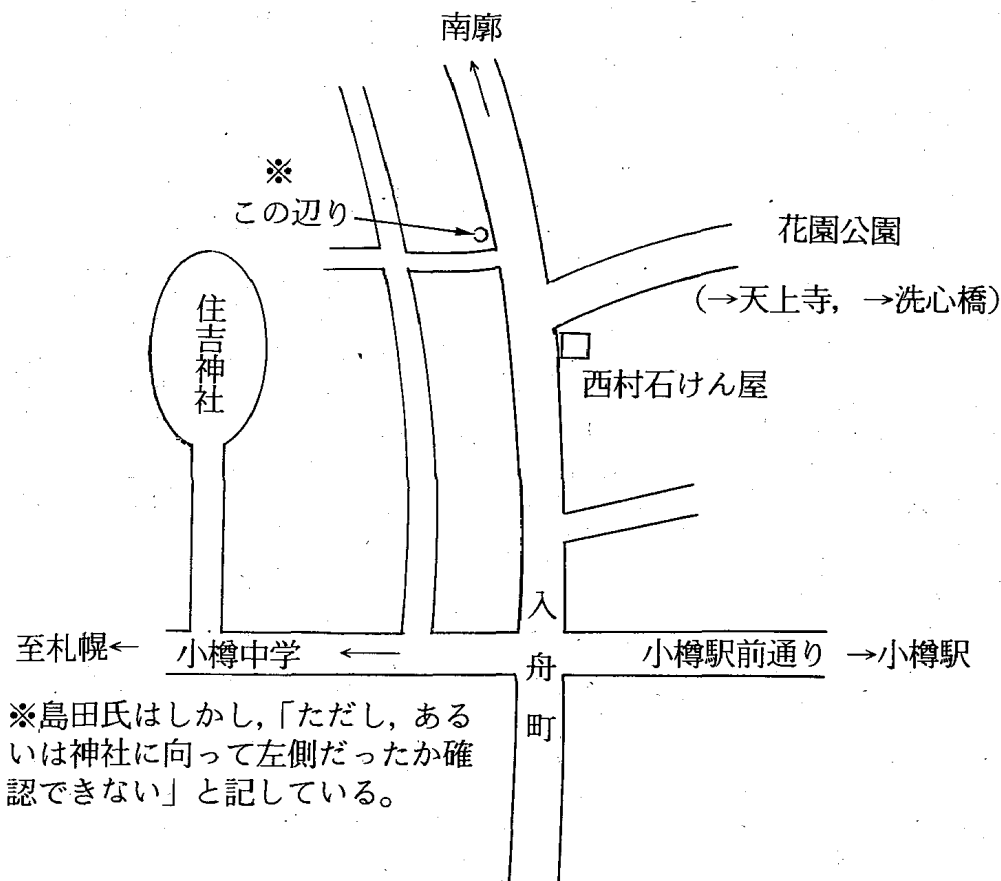
多喜二が高商を出たとき、正策たちと一緒に雑誌『クラルテ』を出すのであるが、初めは多喜二は「断層」などという誌名を考えていた。結果的に多喜二が「クラルテ」と付けた。この中に「赤い部屋」という記事があり、ほとんど多喜二が書いた。しかし、第4集だけは同人の新宮正辰が書いた。

余市実科高等女学校の文芸講演会で、多喜二と斎藤次郎、武田暹（すすむ）⁽¹⁰⁾が講演した。斎藤は、フランスのブウロニューの森の文学の話をした。島田氏は講演しなかった。『クラルテ』の連中は文学的に威張っていた。小樽で沢山の同人誌が出ていたが、当時出た雑誌の内容が貧弱だというわけで、「パヤパヤ同人誌」または「パヤパヤ雑誌」と呼んでいた。

多喜二は自分で、頭の鉢が大きいと言っていたように、正策が多喜二の帽子

(9) 新日本新書，上，1974年，112ページ

(10) 小樽中学卒。『クラルテ』の同人になる。
小樽図書館に勤めた。



島田氏の記憶による当時の地図

を被ると、大きくて、目までおりてきてしまう。多喜二は身体は小さかったが、手はきれいな手をしていた。

島田氏は、室蘭から小樽へ転勤になって間もなく、おそらく大正12年ころ、多喜二と一緒に一度、石狩へ行ったことがある。それについて多喜二の感想文が『素描』に載った。2人で川辺から石狩平野を写生したことがあり、島田は、多喜二の描いた地平線が高いので、注意したら、逆に確信をもって答えられた。また宿の家は、多喜二の姉の結婚先の親戚であったが、その子供と話しているのが、機知に富んだやり方だった。

大正13年12月27日に、小樽の手宮で火薬の大爆発が起きた。信管の事故だった。5丁(=500メートル)離れていたが、島田氏の勤めていた事務所が壊れた。島田氏は2階で仕事をしていて、その2階が落ちてつぶれた。彼は意識を無くした。意識を回復し、見ると、血が流れていた。ガラスの破片が横

顔に刺さり、釘が頭を刺していた。爆発の勢いは大きく、レールが飛んだし、音が札幌まで聞こえた。島田は20日間、小樽病院に入院した。多喜二はすぐ見舞いに来てくれた。

片岡亮一は多喜二の庁商時代の親友である。また小樽高商にも多喜二に1年遅れで入った。さて片岡の家の近くに小川医院の小川郁栄という美人がいた。片岡は美男子であり、片岡は好きだった。多喜二は彼女が美人だということを知り、好きになった、多喜二は美人にかんして露骨であった。ところで彼女は背が高かった。片岡はだから、多喜二にたいして「大木に蟬だ」と言った。

片岡が、好きな女性とのいきさつがあって、会えないでいるのを知った多喜二が、会えるように工作した。それに対して、大正14年ころか、その秋、小林が志賀直哉をまだ「卒業」しなかったころ、片岡は、志賀直哉の名で葉書を多喜二に、近々北海道に来ると、書いた。多喜二は「志賀直哉からハガキが来て近々北海道へ行く、行ったら寄る、ということだ。来たら俺の家は狭いが、来て貰って、皆も呼んで会をやろう」と言って、島田にその葉書を見せた。さて片岡は島田に、ちかごろ多喜二はどうか、または「小林がこの頃喜んでいないか」と聞いた。島田は、「すごく喜んでいるよ」と言った。「そうだろうと思って。俺が書いたんだが、判らないのかな」。片岡は当時字が下手だった。だまされた小林は「片岡はけしかせらん」と言って、大変怒った。しかし小林はいつまでも根にもつということにはなかった。片岡は、後年、日本銀行へ勤め、ニューヨーク支店へ行き、札幌支店次長になり、その後、預金局長になった。70いくつかで亡くなった。

島田氏は当時、住之江町に住んでいた。南小樽駅ホームが家の裏から見える場所で、当時、量徳女子小学校正門の向かいであった。

昭和2年春、勤め先へ行くとき、多喜二が築港で汽車に乗り、島田が南小樽駅の近くにいたので南小樽駅で降り、2人で街を話しながら歩き、勤め

(ii) この場所は琴坂守尚先生が最近確証した。

先に行っていた。小林が色々な話と一緒に、「夕べ稲穂町の説教所⁽¹¹⁾へ行ってみたら、聞きに来た労働者が、外へ一杯あふれて、そこへ警官が並び物凄い有様だった。矢張り労働者はちがったものだ。農民の問題にでもあんなに動員されるんだからなあ。」と言って、非常な関心をもって話した。これは磯野小作争議の演説会である。

昭和2年、小樽の荷役の労働争議、つまり港湾争議で、防衛組織が作られた。島田の勤めていた三菱が石炭を取り扱っていて、その荷役に関わっていた労働者も係わりがあったので、会社の庶務係にいた田村の発案で作られた。だがこれは何の働きもなかった。正策は連絡係になっている。このゼネストでは、小林は時々労働組合を訪ね、ビラ書きなどを手伝った。そして武内清⁽¹²⁾から「これはあまり観念的だ」という批判をされながら教えられた、と後で島田に言った。

その冬ころ、多喜二と島田は論争をした。「商売をやって儲けるとはどういうことか?」と多喜二が聞く。島田は、習った限界効用説を用い、需要と供給で答えたら、多喜二は労働価値説に立って、搾取によって儲ける、と説明した⁽¹³⁾。島田は勉強が足りないからもう少し調べて、彼の家に行った。夕方彼の家へ入っていった。コタツに入って話し合った。島田が「今日は俺の勝だぞ」と言ったのを、多喜二は非常に怒った。その日は結論に達しないで別れたが、小林は、議論をする時にはいつでも自信にみちた論法で、ミジンも危なげのない理論を展開する。それだけ勉強していた。結局島田はその時は承服しなかったが、その後まもなくマルクス主義経済学の本を読むようになった。

その後、「いい所へつれて行ってやる」と言って、多喜二は島田を社会科学研究会へ誘った。3・15事件の後、秋ごろ、島田はそこに参加した。メンバーは、高崎徹⁽¹⁴⁾（この時、小樽高商ロシア語講師）、高橋運蔵（北海道銀行、晩年、森

(12) 注(56)を見よ。

(13) より詳しくは、「小林多喜二と私」220-1ページ

(14) 札幌大学の教師をしていた、と島田氏。後、北海道新聞入り。1946年に、道新レッドページにあう。

川商店取締役), 吉田 (明治製菓), 寺田行雄 (北海タイムス新聞記者)⁽¹⁵⁾, 古川友一⁽¹⁶⁾ (ともかず) であった。島田は途中で入ったわけである。その後, 因藤荘助 (貯金局), 脇坂圭治 (貯金局)⁽¹⁷⁾, 友永重雄 (北日本汽船, 東大出)⁽¹⁸⁾ が加わった。友永は小樽の丸文書店でマルクス主義の本を買ったところ, それを見ていた多喜二が早速誘い込んだのである。島田が入った時は, すでに始まっていた猪股津南雄の『金融資本論』⁽¹⁹⁾ を中途からやり, 冬に入って『資本論』をやり始めた。毎週各人の家で持ち回りで開いた。昭和4年になると, ときどき, 森良玄⁽²⁰⁾, 風間六三⁽²¹⁾, 広川広司 (ひろし)⁽²²⁾ が来た。小林は必ず時間には来た。島田が入る前は政治問題もやっていたが, 彼が入った時はもっぱら経済学の研究会をやるという申し合わせであった。

片岡が, 「小林がもしブルジョア的に進んだら, 先ず菊池寛に負けないだろう」と言った時, これを聞いた小林は全くカンカンになって怒った。仮りにも菊池寛などと比較されることを嫌悪した。小林はその当時は, 俗悪なものを憎み, ただただ革命的情熱に燃えていたからだった。

多喜二の「女囚徒」が『文芸戦線』に載った。彼はほとんど自分の身边に起きたことは細大となく島田に話した。この頃のことつまり, 文芸戦線とプロレ

-
- (15) 1905 - 1944, 小樽出身。第5回庁商卒業, その後, 小樽高商卒業。高商在学中には, 有名な軍事教練反対闘争の重要な活動をしている。多喜二に思想的な影響を与えた重要な人物。3・15事件に連座。全協活動をする, 昭和5年, 全協事件で逮捕され, その後, 東京, 大阪へ出て, 終戦を見ずに死んだ。
- (16) 1889 - 1945, 小樽市役所に勤務, 3・15事件に連座, 1928年当時, 労農党小樽支部執行委員。
- (17) その後, 日本赤色救援会小樽支部メンバーになる。
- (18) 1904 -, 山口出身, 全協で活動, 1930年12月検挙される。
- (19) ヒルファディング (1877 - 1941) Hilferding 著, Das Finanzkapital, Wien 1910 にもとづいて猪股が解説したもの。
- (20) 1907 -, 合同労組, 野付牛出身, 野付牛中卒, 小樽・樺太・福島で活動, 4・16事件に連座。
- (21) 1907 -, 小樽中学卒。4・16事件に連座。1933年2月, 全協小樽地区協議会準備会を結成。
- (22) 1905 -, 4・16事件に連座, 古物商, 無産青年小樽支局員, 1931年10月検挙される。

タリア芸術連盟との対立⁽²³⁾、多喜二が文芸戦線から脱退したことを、後に告げた。それからこの作品の反響について話し、また多喜二は見なかったが、それが上演された時のその状態を話した。多喜二は自分の作品を自分の子供のように愛した。誰かがそれについて反対するような批判を加えると、一応自説を述べて論戦する。しかし時間がたつと、「あんな古いものは」と言い出した。いつでも前進をやめなかった。

1924（大正14）年にすでに普通選挙法が可決されていた。それと抱き合わせで治安維持法⁽²⁴⁾も決まった。島田氏は前半生をこの治安維持法によって痛めつけられるのである。

昭和3年の初の普通選挙の時、多喜二は、北海道の第1区（衆議院）から立った山本懸三（1895 - 1942）⁽²⁵⁾の応援に、倶知安方面に行ってきたことを話した。「演説をやって、政治は台所と直結しているという風に話していたのだが、とうとう、堂々めぐりになって、どうしても話が進まないのですっかり野次られてしまった。」

3・15事件後、多喜二は島田に「いま必要なのは天野利兵衛のような人だ」と、2度くらい言っていた。風間によると、多喜二は3・15事件で捕まった人に警察の様子をしつこいくらいに聞いていた。それが小説『一九二八年三月十五日』に利用されたのである。

多喜二は島田に、搾取について説明した。島田氏は「貧乏だったから、多喜二から搾取を解明され、だからこういう考えをもてた」と語る。多喜二は正策のことを、初め「島田さん」、次いで「島田君」、その後「島田」と呼ぶようになった。つまり初めは庁商の2歳上の先輩として「島田さん」と呼んでいたが、だんだん親しくなり、そのうち思想的に自分より後輩と見なすようになったの

(23) 『文芸戦線』は1924年創刊。1927年に分裂し、主流の労農芸術家連盟、それ以外の日本プロレタリア芸術連盟、前衛芸術家同盟ができた。

(24) 参考、荻野富士夫『特高警察弾圧史』せきた書房、など。

(25) 労働者出身の活動家、この頃共産党中央委員、この時、労働農民党から立候補し、落選した。

である。

日本共産党の合法機関誌といわれる雑誌『マルクス主義』に、1924（大正13）年、福本和夫⁽²⁶⁾の論文が載った。それまで日本共産党の指導理論であった山川均の理論を批判したものである。前衛分子の結集こそ当面の課題であるとし、理論闘争による分離・結合を説いた。彼の考えは福本イズムと呼ばれる。これは1926年から台頭した。彼の説く「分離・結合」論、理論闘争という用語は、左翼に流行を起こした。そして彼は1926年12月、日本共産党第3回大会（山形県五色温泉）つまり党再建大会で、中心的に活躍した。

島田と多喜二が毎日通る花園町に、丸文と左文字という書店があって、帰りには、たいがい寄って見た。「女囚徒」の話が一段落すると、今度は多喜二は、福本和夫の「マルクス主義の為に」を買って読んでいた。そして有名な「何処も否」というような文章を話した。多喜二は、「中々面倒だ」と言った。

多喜二が小説「蟹工船」を計画したのは、この話をしたこの年の暮れころからである。「俺は今主人公のいない小説を書こうと思っている。出てくる人物が皆主人公になるのだ。新しい形式だ」⁽²⁷⁾と話した。そしてレベヂンスキーの「一週間」を読めと薦めた。その後「北洋に出ている蟹工船の船長から、手紙がき

(26) 1894（明治27）年、鳥取県に生まれる。東大法学部卒業。ドイツ・フランスに留学し、カール・コルシュに学ぶ。マルクス・レーニン主義者として帰国する。帰国後、小樽と山口の高商で口が空いていて、山口高商教授になり、商法を教える。

1927（昭和2）年に福本理論がコミンテルンに持ち込まれ、そのための会議がモスクワで開かれた。コミンテルンに呼ばれて、福本、佐野文夫、渡辺正之輔らは、日本を脱出し、モスクワへ行く。片山潜が参加し、渡辺政之輔、佐野文夫、福本和夫、徳田球一、河合悦三らによって、日本問題特別委員会が組織され、徹底的な討論が行なわれた。その結果7月に「日本問題に関する決議」、いわゆる27年テーゼが出た。執筆はブハーリンであった。山川イズムとともに、福本イズムが批判された。福本のインテリゲンチア過大評価、労働者大衆からの遊離、セクト主義、が批判された。福本自身も誤りを認め、共産党の中央委員を辞任することになった。この批判以降、福本理論は指導性を失っていった。彼は3・15事件直後、入獄し、非転向のまま在獄14年であった。

(27) もっとも、主人公のない戯曲としては、すでにゲルハルト・ハウプトマン Gerhart Hauptmann の『織工』Die Weber, 1892年がある。

ているが、全くひどい、海の監獄だ」といった。そして方々の友達に依頼してこの調査を進めていた。村上由⁽²⁸⁾が島田に戦後話したが、村上は昭和2年の小樽の運輸労働者の争議⁽²⁹⁾の応援に来ていて、小林と会い、蟹工船の事について話したことがソモソモの始まりである、と。この問題を村上のパンフレットから引用したい。村上が「磯野争議の応援に小樽にきたのは昭和2年(1927年)の1月のことだった。……合同労組の3階、といっても屋根うらだが、そこへとまりこんで活動した。そのころ小林多喜二がちょいちょい情報をもってきたり、ビラかきの手伝いにきたりしていた。……

また多喜二に北洋漁業、カニ工船の話をしたところ、もっとききたいというので、相当時間をかけて、カニ工船の漁夫・雑夫の虐待の話をきかした。

……負傷者をカニのゆで汁につける話、函館からつんでいったままのくさったような水でめしをたき、また、飲料水にする話、日本の軍艦護衛のもとに、ソ連のカニ網をぬすみとる話など、カニ工船の賃船闘争のときにくわしくきいていたのを多喜二にはなした。また、函館の乗富⁽³⁰⁾(……安田銀行員)のところにくわしい資料がたくさんあることも教えた。

多喜二はのちに乗富さんのところに問い合わせを出している⁽³¹⁾。

1928年に治安維持法は改悪され、最高刑が死刑までとされた。

全協⁽³²⁾が作られ、三田村四郎⁽³³⁾がペン・ネーム小泉保太郎で『無産者新聞』⁽³⁴⁾

(28) 1901年、小樽の銭函に生まれる。当時、函館合同労組で活動。小樽の磯野争議の応援にくる。戦後、共産党統制委員長。

(29) 引用から分かるように、村上は港湾争議でなく、磯野争議の応援で、来た。

(30) 乗富(のりとみ)道夫、1903 - 34、福岡出身、小樽高商の多喜二の同窓生。卒業後、安田銀行函館支店に勤める。産業労働調査所函館支所員であり、北洋漁業の調査をしていた。

(31) 村上由『北海道 労働運動ものがたり — 私の歩んだ40年 —』共産党北海道委 1965年 47 - 9ページ

(32) 日本労働組合全国協議会。

(33) 今の小樽ホテルの建物。

(34) 『無産者新聞』は、解党した日本共産党の再組織運動の過程で結成された「コミュニスト・グループ」の合法機関紙として創刊された。第1号は1925年9月20日で

の付録に「政治的自由獲得労農同盟はいかに発展し {又} 発展せしむべきか」を書いた、と嶋田氏は言う。この同盟は、3・15事件で労働農民党が解散させられ、その後これらのメンバーによって作られたカンパ組織である。しかし、覆刻版『無産者新聞』によれば、これに類したものは、小泉保太郎「新党準備会は今後如何に発展し行くべきか——また如何に発展せしむべきか」である。(『無産者新聞特別号』〔昭和3年〕12月24日)それを多喜二、正策、寺田が、3人集まって、寺田の家で話し合った。寺田の家は正法寺のすぐ下にあった。組合運動を援助するべきだということになって、「嶋田君から申し入れよ」と多喜二が言った。嶋田は森良玄に話した。すると森は、多分入党希望と間違えて、「そういうことはそちらから言うものではない。必要があればこちらの方から頼みにいくよ」と答えた。

昭和4年、正策は森から入船町の風呂屋へ来なさいと言われた。正策の入党の件であった。行ってみたが、森は来なかった。その後、入党を言われた。3・15事件の後である。心配だと言うと、「すべて暗号で記録されるから、大丈夫だよ」と森は言った。この頃、中央からオルグ杉本文雄(現、名誉中央委員)が来た。

多喜二も入党を希望していた。3・15事件の苛烈な弾圧を知っていながら、進んで入党を希望するというのは尊敬する、と嶋田氏は言う。だが文学者としての立場を考えて入党が認められなかった。嶋田氏が森から入党を誘われた時、多喜二の話をしたところ、森は、文学活動の方が効果的だと答えた。堅田精司氏(札幌)によると、森は多喜二の入党の話を聞いたことがない、と堅田氏に言った、と。もしそうだとすると、森は忘れているのだろう、ということになる。しかし多喜二本人から森への話についてははっきりしない、と嶋田氏は言う。

あった。1926年暮れに日本共産党が再建されてからは同党の機関紙であった。1929年8月20日で終刊となった。初め月2回刊で、すぐ週間となり、1927年9月からは五日刊(5日に1回)となった。全国に百数十の支局が作られ、発行部数も1万5千から4万部と、戦前の社会運動の機関紙誌のなかでは最大規模であった。だがその半数は発禁処分を受けた。

(法政大学大原社会問題研究所編 覆刻版『無産者新聞』まえがき参照)

戦旗社のシンパ事件で多喜二が未決に入っている時、多喜二は「東倶知安行」について島田に手紙を寄越して「……あんな幽霊を今更出したくない。……」と書いた。

当時多喜二は拓殖銀行⁽³⁵⁾で為替係をしていた。よく、図書館の武田暹、百十三銀行の平沢哲夫、辻七四郎、同窓の斎藤次郎などと集まって、呑み、話し、遊んだ。島田は多喜二と一度淫売屋へ行ったことがある。多喜二はいつでも、自分で楽しむよりも、人生の探求をよることのほうが多い。いや、全然それが目的なのである。そういう経験は皆、作品となって発表される。「最後のもの」が『創作月刊』に載った時「銀行の女達はどう思っているだろう。小林がこんなことを知っているのかと思うだろうな。俺はストリンドベリイの影響を受けて、直接法で書くからなあ」と述懐した。

あれだけ沢山のすぐれた作品を、彼は銀行の仕事の合間にやってのけていた。それでなお銀行員として一人前であった。彼の当直の日なども島田はよく銀行へ行って話した。地下室当直室があって、すぐ側の部室に玉突台が備えてある。島田が撞球をやろうと言うと、たまにやることもあったが、たいていはやらない。そういう無駄な時間を彼は費やさないのであった。

4月に正策は、青森の大湊に出張した。小樽に戻ってまもなく、小林が4・16事件を知らせた。相当広範囲にやられている、と言った。島田は4月20日に捕まった。小樽水上警察に連れて行かれ、それから小樽警察へ行き、その後、札幌で裁判された。9月ごろ、あるいは11月⁽³⁶⁾、懲役2年、執行猶予5年で釈放された。検挙前に小樽から札幌にすでに移り住んでいた妻の家族と、生活することになった。

予審が済んで文通ができるようになった時、多喜二から手紙がきた、「『蟹工

(35) 第1次共産党が崩壊して、「レフト」というグループで活動を始めた。3・15事件の検挙を逃れ、一時期党中央で指導し、4・16で捕まった。死刑宣告され、その後、転向する。

(36) 「ネヴォの思い出」147 ページ

船』が発表になって、大きな反響をよんでいる、之は是非今の君に見て貰い度い、君の妻君は、君よりは元気なこと」であった。小林からは2度手紙が来た。2度目のものには「自分が書いたもの⁽³⁷⁾のために銀行を首になった、之から、母や家族を抱えてどう生活を立てて行ったら良いか、苦しい立場に置かれている、然し、頑張る積もりである、今度の作品で、自分の作家としての地歩が出来た、然し、自分は他の作家の様に東京へ出て、作家気取りはしない、尚、君からの大きな借金⁽³⁸⁾は決して忘れていない」と。

この4・16事件で捕まったのは、森良玄によると、「中央に記録魔がいて、——間庭末吉——その記録が盗られたからだ」った。しかし森は警察で喋っている。検挙者は、森、松本和三⁽³⁹⁾、風間六三、嶋田正策、嶋田清作⁽⁴⁰⁾、嶋田きよし、らである。4・16事件で小樽で捕まった人は、その他に、佐藤稔(1910—、思想要注意共産主義とされた)、嶋田勇、広川広司がいた。

4・16事件で拘置所にいる間に、勤め先の三菱から退職届を出すように要求され、会社の都合で止める場合は千円の退職金が出るどころ、自分から辞めたので、その半分を貰った。三菱には8年勤めた。

嶋田は12月に執行猶予で出獄した。小林は大変喜んで迎えてくれた。2人は一晩話し明した。その時小林は、『蟹工船』の中で、「献上品に石コロでも入れろ」という1句が入っていた為に、不敬罪に問われようとして、取調べを受けた話をした。「どうしても悪かったと言わせようと仕向けられて、結局、悪かったと言って、やっと帰された。無理に強がりをする必要はない」と言った。

また出獄してから聞くと、「不在地主」が問題になって、重役会では小林を銀行では雇って置くことが出来ないということになったのだ、と言っていた。

小林は嶋田との交際の間で、全く困パイしたように思われまた、そのことを

(37) 「不在地主」のこと。

(38) タキの身請けの金の一部、200 - 50 = 150 円のこと。

(39) 1906 -、静岡出身。小樽で活動、全日本無産者青年同盟小樽支部員、3・15事件と4・16事件に連座。嶋田氏と全く同じ発音の名。

(40) 1901 -、1928年1年当時、労農党根室支部支部長、小樽でも活動。

口にしたのは、2度ある。1度はタキとの恋愛問題であり、1度は彼が鹹首に会った時のことである。

出獄後島田は札幌に居を移したので、そう度々多喜二に会えなかったが、小樽へ出て行って二、三度会った。札幌では4・16事件の控訴公判と一緒に傍聴にいったりした。札幌に来ると本屋に寄った。維新堂である。店頭には、多喜二の「暴風警戒報」が出ていた。2度ほど寄ったが、いつも同じくらい残っていて、小林はそれに手を触れて見た。その時彼は、林房雄⁽⁴¹⁾がナップ⁽⁴²⁾の規約を無視して勝手に自分(=林)の作品を出版したことを、本当に非難し、そのやり方に憤慨していた。

釈放された後は、島田は新聞広告で日本生命保険会社の外交員に就職し、月給50円であった。確か昭和5年のことで、2月初めである。保険を勧誘した中には、元の勤め先の支社長で佐藤棟造の家族や、先輩、そして当時の庁商に入学した生徒などがあつた。三菱の元の主任は島田に、「君ならどこか仕事を世話してもよいが、運動はやる気か」と聞かれて、「私は執行猶予の5年間はやらない」と答えたら、残念そうに、話はそれっきりになった。この話を小林にすると、小林は笑って、「俺なら運動なんかやらんと答えるよ」と言って、島田の融通のきかなさを批判した。島田は、なかなかそれが出来ないのだと言うと、小林も、それはよく判るが、君は低徊的だと言う意味のことを言った。

昭和5年3月、日本生命に就職してから、出獄後初めて、島田が小樽の若竹町の多喜二の所を訪れ、話がつきないで彼を札幌へ連れてきて、南6条西9丁目の島田の家に泊めた。多喜二は島田の家で妻がいるので、嫌がって押入れに寝た。その日の話では、検挙されて、強がりをいって長い間拘置されるより、度を越さない程度に頭を下げて帰った方が良く、というものであつた。また島田が日本生命に就職したことについて、多喜二は、「島田さんは資本家の手伝い

(41) 初めプロレタリア作家。戦後、有名な小説家となり、『大東亜戦争肯定論』を書いて論議を呼んだ。

(42) 全日本無産者芸術団体協議会

をするのか」と皮肉めいた批判をした。

翌日札幌駅へ行く途中、北2条西3丁目にあった佐藤八郎⁽⁴³⁾の経営する「ネヴォ」(ロシア語で「空」の意味)に、多喜二が寄った。佐藤は、小樽出身の演劇関係者である。これが島田が多喜二と会った最後である。5月、あるいは3月末、多喜二は上京した。

小林が作家として名を売るようになったことに触れたとき、彼は「結局俺達は仲間があったから、仲間で押し上げてくれたのさ」と言った。

彼は東京へ出た。かつて北海道で創作を続けると言った彼を、矛盾したように思われるが、これはむしろ彼の生長だと、島田は思っている。

2 多喜二以後

多喜二が上京した後、6月ころから島田氏は札幌で全協運動をした。日本労働組合評議会に代わる左翼労働組合として、1928年の暮れに日本労働組合全国協議会(全協)が結成されていた。全協は赤色労働組合インタナショナル(プロフィンテルン)に加盟したし、産業別労働組合の組織原則に立った。だがこの活動は事実上の非合法状態に置かれた。

さて島田たちは、札幌の豊平で、労組と称し、一般労働組合(札幌一般労働組合)の運動をする。高村岩吉(印刷工, 1909-?)⁽⁴⁴⁾, 相沢純一⁽⁴⁵⁾, 大門隆三⁽⁴⁶⁾(国鉄苗穂工場職工)と一緒に活動した。なお、墨崎信(オルグ)⁽⁴⁷⁾, 寺沢廸

(43) 『ネヴォの記』を執筆・編集した。

(44) 札幌出身、画工。3・15事件に連座。1930年、日本赤色救援会札幌支部を結成。全協組織に勤める。特要とされた。なお、高村光吉として(高村岩吉か)で、1928年から29年にかけて思想要注意人(共産主義)として当局監視、ともある。

(45) 相沢純一(1905-1961)は、小樽の木材屋の息子で、金持ちであり、島田とは庁商の後輩である。この組合で組織部兼財政部長。1930年、日本赤色救援会札幌支部を結成。全協活動。小屋社同人。1938年検挙される。ペンネーム・南順次。特要とされた。

(46) 1892-1963。苫小牧出身、労農党员。3・15事件に連座。労要(友愛会苫小牧支部)。1930年、日本赤色救援会を結成。

(47) 1904-、はじめアナーキストとして出発。1930年5月反帝同盟中央部員となる。

雄⁽⁴⁸⁾、森川武義⁽⁴⁹⁾、が加わって、全協の拡大をすすめた。昭和5年の秋、豊平川原で7人が全協の拡大方針を作った。として、海員組合の笹谷金吾⁽⁵⁰⁾、小川兼五郎（小樽の浜の労働者）⁽⁵¹⁾、寺田行雄、友永、遠藤誠（1938死）⁽⁵²⁾、もう1人3・15事件で出てきた寺島儀蔵⁽⁵³⁾、武田武⁽⁵⁴⁾（この人は、一時、柄沢とし子⁽⁵⁵⁾の夫になる）が加わった。

さてこのうち、笹谷金吾は、豊平川原の会合に出席したが、検挙されなかった。後になって風間六三の話によると、笹谷は警察の人たちとしょっちゅう呑んでいたということであった。そこで島田氏たちは、彼をスパイだと断定している。

多喜二は戦旗社のシンパ事件で未決に入った。島田があまり多喜二に手紙を出さないの、多喜二は手紙の催促をしながら、獄中の様子を書いて寄越した。その中で「秋深く隣は何をする人ぞ」という句が書いてあった。そして獄中では大変勉強ができて良いから、島田が買った世界名作大観の「高慢と偏見」だとか、その他チェホフのものなど2、3本の本を送るように言ってきた。

島田氏は昭和5年12年1日に、12・1事件で捕まる。暁の手入れであった。

後、旭川で全協活動。

- (48) 1907 - , 長野出身, アナーキストとして出発。日雇い, 全協活動, 1930年検挙される)
- (49) 森川武美だとすると, — 1903 - , アナーキストとして出発。後, 全協活動家。1930年12月, 検挙される。当時『戦旗』旭川支局。
- (50) 多喜二も関係した小樽の『海上生活者新聞』の発行人になったことがある。この新聞は, 小樽多喜二祭実行委員会によって1989年に覆刻された。
- (51) 1898? - 。秋田出身, 日雇い, 小樽合同労組員。3・15事件に連座。全協活動。1930年12月, 検挙。小樽協同社。
- (52) 1903 - 1938。鉄工職。労注共産主義とされた。1927年, 札幌メーデーに参加。札幌一般労組執行委員。全協活動, 30年検挙。
- (53) 1907 - , 根室和田出身。1930年12月, 検挙される。
- (54) 1904 - 。福島出身, ペンネーム 針金武。思想要注意社会主義とされた。1927年当時, 思想要注意人として監視されていた。全協札幌一般労組員。のち上京。
- (55) 1911 - 。札幌出身, ペンネーム・坂場とし子。札幌高女卒。青バス争議指導。札幌鉄道で全協活動。1933年検挙。武田武と結婚。戦後代議士。

全協の活動が治安維持法違反に該当するということであった。島田は控訴して懲役4年、墨崎は5年であった。相沢、遠藤、高村も捕まった。島田は4・16事件の執行猶予が取り消されたのを加えると6年であった。だが未決通算で150日×2=300日が減らされた。結局、下獄したのが昭和7年3月7日、苗穂刑務所であった。服役中、皇太子（現天皇明仁）誕生による恩赦があって、残刑の2分の1が減刑となった。出獄したのが昭和10年3月15日であった。

12月事件で、日本生命を辞めざるをえなくなったが、後輩の三浦強太が日本生命に交渉して、給料その他を貰った。それは後で知った。この時、初めの妻も逮捕された。起訴はされなかったが、職場を追われた。そしてついには夫婦間の不幸な事態にいたることになる。

島田が逮捕されると、代わって小林が保釈で出た。今度は島田が手紙の催促をした。ただ一度彼から手紙がきた。「君のやった事は正しい。外では運動がどんどん進んでいる。新しい時代が今にやって来る。国際的にも、国内的にも、毎月の様に沢山のことが起こりつつある。今その為に自分は休まない活動をしている。元気で、此の次の便りを持つ様に」とあった。

警察では未決の時、島田はズボンのバンドで殴られたことがある。森から赤旗の歌を歌おうと言われたことを思い出し、未決拘置所で皆で歌おうと計画した。初め断食しようという案が出たが、島田は止めようと言い、歌を歌うことにした。「民衆の旗、赤旗は……」である。看守は止めろ、と言ったが、皆で歌った。誰が計画したかを喋る奴がいて、島田だということが分かる。規則違反で、島田、大門、高村が、後ろ手に縛られ、吊るされた。ちょうど足が床に着くか着かないかの高さに吊るされる。痛いというよりも分からなくなる。むしろ下ろされる時に、痛い。

また札幌刑務所でのことである。恐らく武内清⁽⁵⁶⁾の指導と思われるが、冬期、

(56) 1902（明治35）年、函館生まれ。1918－20年、上京。1921年、函館水電の車掌になり、1923年のストで解雇される。1924年、函館合同労組、函館無産青年同盟を組織する。東京へ。1925年、第1次水電争議の指導をする。9月、結成された小樽合

寒さを凌ぐため、それまでなかった湯タンポを各房に入れさせる要求を出し、闘いとしている。

全員独房である。改心した人は工場へ行く。そうでない人は作業を続ける。島田は改心しないので、鱒網、軍手かがり、をした。

ここで「飯を増やせ闘争」をした。武内の指導であろう。飯は10等級あり、彼らは10等であった。作業する者は7等である。1等級あげろという要求で、通ってしまった。獄房は、2つの房に10燭1つの電灯であって、各部屋につくろという運動をした。武内の指導であろう。これも通ってしまった。島田氏は、武内はえらいやつだ、と言う。

昭和8年2月20日の多喜二虐殺は、掃夫が21日の朝に知らせた。

森は転向声明をしたと、島田氏は想像している。ただし断定はまだできない。転向声明をすると、赤い作業服が青になる。そして森はそうなった。島田氏は転向声明をしないのに赤作業服が青になった。その理由が分からない、という。また転向声明を書けと言われたが、島田は書かなかった。

12月1日事件の後、しばらく札幌の弟・正克の家で厄介になり、2、3カ月後、同じ事件で先に釈放された寺沢廸雄からその勤め先の北辰病院で、働く気があればと誘われて、島田は雑役夫に就職した。ここで新しい妻と知り合い、結婚した。それから病院を辞め、色々な仕事についた。札幌逓信局の建築、富貴堂書店改築の基礎工事、御影石の切断、丸井今井デパートの増築工事、ク

同労組の常任になる。その後、日本労働組合評議会北海道地方評議会の争議部長になる。1926年、小樽運送はしけ会社の解雇反対闘争を指導し、勝利させる。その後、小樽合同労組の幹部として磯野小作争議を指導。1927年、磯野争議に勝利。小樽港湾争議を指導する。共産党に入党。1928年、共産党北海道地方委員。3・15事件で検挙され、懲役6年となる。1935年、非転向で満期出獄。1936年、全小樽労働組合の組織争議部長、日本労働組合全国評議会（全評）の中央執行委員となる。1937年、全評北海道地方評議会が結成され、委員長になる。12月、「人民戦線事件」で検挙される。1942年、非転向で満期出獄。東京予防拘禁所に送致。1944年、釈放。1945年、共産党の初代北海道地方委員会書記長。1946年、中央委員候補。総選挙に立候補し、落選する。同年亡くなる。多喜二の小説『転形期の人々』の旗塚のモデルであった。（文献『武内清の思い出』1977年）

ラッシャーによる石割り、拓殖銀行の窓ガラス拭き、豊平川上流流域の整地と、専ら土木工事に従事した。

昭和12年12月15日事件、つまり人民戦線事件⁽⁵⁷⁾で、12月1日の朝、襲撃された。検挙され、警官でなく検事が調べた。この時、一般労組の書記、実際の書記長をやっていた。伊藤という労働者がいて、アメリカからの野坂参三⁽⁵⁸⁾の手紙の文を島田に見せた。すぐ返したが、警察の手ではないかと島田は推測している。この時は6、7カ月入った。

昭和15年の初め、『小樽新聞』に世話をする人があって、昭和15年には最初は校正の仕事、次に編集の仕事につく。月給は50円であった。そのうち、札幌大化院（保護団体）の助川貞利の関係から、北海道莫大小（メリヤス）組合の仕事の誘いがあった。ここにはほとんどが治安維持法関係の人々が就職していて、島田を誘ったのだと、島田は思っている。島田は新聞編集について自信をなくしかけていたので、その誘いにのった。ここで庶務的な仕事に携わった。戦時中であり、ここでは軍の使う軍手・軍足を主としたメリヤス製造の、戦時中の統制組合で、北海道内の業者の統制が仕事であった。

昭和16年12月太平洋戦争が始まる翌日の朝、予防拘禁法で、島田は捕まった。この時は、13日で短かった。保護施設の委員長・助川貞利が工作したからである。彼は多分、保護司の手伝いをやっていたのであろう。この時、島田氏は、メリヤス組合の書記をやっていた。こうして島田は、生涯で4回、治安維持法で引っ張られた。

妻は島田の前歴を知らないで結婚した。捕まった時、彼女は、大泥棒と結婚したのではないかと、どこか金が隠してあるのではないかと、長女を生むとき、正木清⁽⁵⁹⁾が病院に頼んでおくとしたが、連絡がされていない、

(57) 世界的な人民戦争線 Popular Front 運動の経験によって、日本にも影響された。だが日本では余り発展しなかった。

(58) 共産党幹部。作『風雪の歩み』新日本出版社

(59) 1900 - 1961。福島県出身。1924年、小樽に移住。1925年、小樽総労働組合に参加、政治部長になる。1926年、労働農民党小樽支部が結成され、その書記になる。1927

それで座りこんで入院し、出産した。「民を衛る」で多美衛にしたかったが、…子になって残念だ、と島田は言う。この時、彼は人民戦戦事件で逮捕され、警察に拘留中であつた。

戦争が終わつた年、1945年の12月、日本共産党が再建され、北海道の党も、札幌の中島公園近くの集会所で再建の会が開かれた。島田はその場で書記として記録をとったりした。もちろん初めて正式に入党した。

ところがその後、狸小路の近くに北海道党の事務所があつたが、島田の勤めていたメリヤス組合が近くにあつたので、ときどき党の事務所に寄つたことがある。それをメリヤス組合員の主だった者が見とがめて、辞める羽目になった。当時の月収は150円で、退職金は2万円であつた。

その後、島田は、謄写版の筆耕をした。『小樽新聞』へ行く前まで、ときどき岸孝一の経営する正文舎という謄写版印刷屋の原紙を切る仕事をしていたので、再就職した。収入はよかつた。1枚100円で1カ月200枚書ける。これは田舎の村長の収入くらいにはなつた。こうして25年間筆耕で生活した。72歳で限界を感ずるまで働いた。この仕事は最も自分の身体に合つた。この間、党にも半年勤め、また民商にも半年勤めた。

その間、終戦後まもなく、道会議員候補として活動した。僅か8百余票の惨敗であつた。天皇問題で野次られて力の足りなさを感じた、と島田氏は書く。さらに広島村では3回、村会議員に立候補した、次点、次々点、次点であつた。

仕事を止めてから、島田氏はご子息のもとで暮し、今は党の仕事だけをしている。ご家族には1女2男がおられる。ご子息は2人とも小樽商大を出て、1人は大学で教えておられる。もう一かたは会社に勤務されている。島田氏は、1988年に金婚式を迎えた。今年88歳である。

年、小樽はしげ人夫ゼネストで活躍。3・15事件で検挙。1930年、出獄。1931年、新労農党に加わり、札幌支部長。全札幌労働組合執行委員長。1934年、札幌市会議員。1936年、道議会議員（社会大衆党）。1943年、衆議院翼賛議会に当選。戦後、社会党中央執行委員、衆議院議員となり、議会副議長となる。（文献『正木清伝』労働旬報社 1969年）

党に関係してから丸60年になる。もちろん正党员としては終戦からだから、44年目（1989年6月現在）にあたる。

むすび

島田氏は、小林多喜二のことを話すのは楽しいと言う。彼から「搾取」という正しい思想を教わって良かった、多喜二はその点で恩人である、と述懐する。人は思想では生きられないと、多くの人言う。しかし島田氏は、自分の考える正しい思想をもって正しく生きた人である。その点で、氏の性格・人格とならんで、立派な人生である。